

西郷の逸話く名前と幼少期エピソードく

西郷隆盛は文政一〇年、一八二七年加治屋町に生まれました。

この加治屋町からは西郷隆盛だけでなく大久保利通、大山巖、東郷平八郎など、たくさんの人たちが輩出されました。そのため「偉人の町」ともいわれています。

西郷さんの祖先は実は熊本、現在の菊池市だといわれ、菊池郡七条村というところに「西郷隆盛祖先の地」という碑も建てられています。

菊池というと九州では朝廷を最も崇拝する豪族だと言われており、西郷さんはその一族、いわゆる末裔だといわれているようです。

この七条村には、増永城というのがあり、この城主の子孫が西郷さんの祖先だといわれています。そこから元禄時代に西郷九兵衛という人が鹿児島にやってきて、それから西郷さんの祖先は鹿児島で生活をするようになっていわれています。それから数えると西郷さん、七代目にあたるようです。



西郷南洲先生發祥之地

◇西郷の本当の名前は？◇

薩摩にきてからの祖先のお墓はかつては南林寺にあり、今は常盤町にあります。そこに西郷家の歴代「吉兵衛」というお墓がずらつと並んでいます。吉兵衛とか、善兵衛という名前が西郷さんの祖先、代々の名前になっています。

西郷さん自身、名前を幾つも変えています。奄美大島に行くときは菊池源吾とされています。菊池は熊本の菊池という地名。「げんご」というのは「吾の源」と書きます。つまり「吾の源は菊池なり。わたくしの祖先は菊池ですよ」とそういう意味で、菊池源吾と名乗っている時代もあるわけです。

「吉之助」というのは実は通称名です。今は生まれてすぐ本名をもらいますが、昔は本名は元服したときにもらいました。これを「忌み名」とか「送り名」とかいいいます。例えば、秀吉は小さいころは日吉丸、それから藤吉郎と変わります。「これを名のれ」と殿様たちから言われてずつと名のつていくのを通称名といえます。

元服する前の幼少のときの名前は幼名といえます。西郷さんの幼名は「小吉」といいました。西郷家の嫡男、つまり家の跡取り息子はみんな「小吉」というふうになっていたといわれています。そして西郷さんは元服して「隆永」という名前をもらいます。

ところが普段、わたしたちは「隆盛」といいます。実はこの「隆盛」というのはお父さんの名前です。

西郷さんがこの「隆盛」と名乗るようになったのは明治時代、維新の功労で官位を授与される際、政府が書類に間違ってお父さんの名前を書いてしまったのです。西郷さんの竹馬の友で、当時宮内省役人であった吉井友実、幼いころからずっと生活をしながらも西郷さんの名前を知らず、この人が間違ってお父さんに伝えたのではないかといわれています。それぐらい実名というのは普段使われていなかったのだといえます。

しかし、多くの人たちが明治維新で死にましたから、生きている自分たちがそういう官位などの恩恵にあずかるのは申し訳ないということで、西郷さんはそれを断ります。そして辞退届を出します。ところが政府が間違ってお父さんの名前を書いていきますから、自分も辞退届に「隆盛」というのを書きました。これが「隆盛」と呼ばれるようになった一番始まりなんです。以後、隆盛という名を使いますが、これが定着するのは晩年です。名前だけでなく西郷さんの変遷、人生がよくわかります。

◇「貧乏は恥ではない」―弟三人、妹三人、七人兄弟の西郷さん

西郷さんは小さい頃から家が貧しく、二〇〇両、今でいうと一〇〇〇万円から二〇〇〇万円程度の借金を抱えていました。二六歳のときにはもうすでに一家の大黒柱でした。同じ年の二か月おきに、おじいちゃんが死に、お父さんが死に、お母さんが死に、お葬式もだせなかつたくらい苦しい生活をしました。

借金がある上に弟や妹を食べさせていかねばなりません。お節句など、いろいろな行事があっても満足なものとは与えられない。西郷さんは、兄弟思いでしたので、よくお節句のときも絵を描いて襖に貼ったり、布団が十分でないときは自分は足だけ突っ込んで寝たり、そうして弟や妹たちを世話したといえます。ただ西郷家は、苦しい生活はしていましたが、お父さんやお母さんがしっかりしていました。特にお母さんは、「貧乏は恥ではない」と教えたんです。「貧乏に負けることが恥ずかしいことだ」と。貧乏だといって卑屈な思いをしている、それこそが恥ずかしいことで、働けば働いているその姿が尊いものだ、そう教えたんです。

「偉人の背後に賢母あり」つまり偉人の後ろには必ず素晴らしい母親がいる、といわれる所以です。それ故、西郷さんは生涯、質素で、派手なことは一切やりませんし、にぎりめし



西郷隆盛・従道誕生地

とか素麺とかさつまいも、そういうものを食べながら生活しました。明治になると給料もたくさんもらいますが、それも自分の懐にはほとんどいれなかったといわれています。

また、小さいころは、勉強にはあまり気が向いてなかったのかもしれませんが。お武家さんですから使用人も何人かいます。そのうちの一人が、「隣の坊ちゃん毎日朝読みをして、素晴らしい。うちの坊ちゃんは太鼓ばかり叩いている」ということを言ったらいいですが、これに西郷さんは大変怒って、一時機嫌が悪かったそうです。しかし、よく考えてみるとそれはそうだと考えて、それから少し勉強するようになった、という逸話があります。

それから、体が大変大きかったということで相撲は強かったようです。また、喧嘩もし、ケチをつけられるなど、いろんなことがあったようです。十三歳の時に、喧嘩を吹っかけられ、横堀三助という人を溝に叩き込んだということがありました。ところが造士館の帰り道に、仕返しに合います。昔は刀を抜いたら自分も腹を切らなければなりませんでしたから、刀をサヤごと抜いてそのサヤで右腕の肘のところを打たれました。ところがサヤが割れて刀が肘に食い込んだのです。そのために西郷さんは生涯右肘が伸びなくなりました。

昔は侍が肘を切られたりして剣術ができないということは、もう大変なショックなことです。しかし、ここが西郷さんの偉いところで、一つがダメであれば次の自分の生き方を考えたということです。そして学問に今度は没頭するのです。けんかが学問をするきっかけになったともいわれているわけです。偉人といわれる人たちはたいてい挫折だとか挫折感だとか、あるいはいろんな試練を乗り越えているんです。人間一つがダメならば次のことを考えようという、こういうのは小さいときに西郷さんは一つ体験したといっても間違いではないと思います。